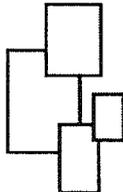




連載『本の紹介』第3回



歴史軸のなかで、学術情報を考える

『歴史の中の科学コミュニケーション』

呑海 沙織

「本には命があります。言いたいことが沢山あるのに聞いてもらえない。書庫の中で囁いているんです。古い図書館はみんなそうです。ここへどうぞ」。阿刀田高の短編『あやかしの声』¹の主人公は、顔じゅう髭だらけの見ず知らずの男に導かれ、アレクサンドリア図書館跡の壁穴に耳をつける。「図書館の書庫があったところです。今でも眩いています。長く聞いてはいけません。さ、行きましょう」

情報通信技術の急速な発展は、学術情報の生産・流通・利用・再生産のサイクルに大きな変化をもたらしている。学術情報流通サークルに属する大学図書館も、例外ではない。また、日本における高等教育は、明治19年に公布された帝国大学令による帝国大学の創設、第二次世界大戦後の新制大学設置に次ぐ、大きな変革期を迎えている。

大学図書館は、「図書館」という側面と「大学の機関」としての側面を持つが、両面ともに大きな変革期を迎えているのである。いいかえれば、「これまで歩んできた道が、これから先もそのまま続くわけではない」、ということである。何の準備もせず、手探りで道なき道を歩けば、道に迷うことは必定。運が悪ければ、命をおとすこともあるだろう。

三叉路で、道を選びあぐねて途方にくれるとき、人はどんな行動をとるのだろうか。天を仰ぐのだろうか。闇雲に歩きだすのだろうか。それとも、立ち止まって考え込むのだろうか。私は、きっと、ふりむくだろう。「あやかしの声」に耳を傾けて、はるか来し方をふりむく。前に進むために。

「歴史のなかの科学コミュニケーション²」は、2000年に出版された”Scientific communication in history³”の訳書である。著者は、1987年に”Information science in theory and practice⁴”を著したB. C. ヴィツカリーである。科学コミュニケーションについて、人類の黎明期まで遡って紐解いている。

(次頁へ)

[目次]

連載『本の紹介』第3回	呑海 沙織	...	1
大図研京都数珠つなぎ 第64回	若井 勉	...	3
支部委員からひとこと(1)		...	4
CGIを利用したアンケート調査の実施例	京都大学医学図書館閲覧掛	...	6
2002年度会費納入のお願い		...	12

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたはURLへお寄せください。

電子メール: dtkk@rg7.so-net.ne.jp (大学図書館問題研究会京都支部)

URL: <http://www009.upp.so-net.ne.jp/dtkk/index.htm>

記者あとがきに、「本書は、物語の重心を科学技術情報の伝達・継承や蓄積・組織化の過程に置き、とりわけそうした過程に能動的に作用する人々や機関・制度に対して強い関心を向けている。そして、道具や手段としてのメディアに目を奪われることなく、また、過剰な人間中心主義をとるのでもなく、メディアと人間との相互作用に載って展開される〈状況〉としての情報現象を描き出している。」とあるように、本書は、メディアにも人にも偏重することなく、科学コミュニケーションについて時系列に語られている。同じく記者あとがきに、「情報の生産と利用の過程がほとんど描かれていない」ことが指摘されているが、このことが一方で、科学コミュニケーションの変化の軌跡をわかりやすく浮かび上がらせているようだ。

本書では、科学コミュニケーションの発達過程を7つの時代区分にまとめている。すなわち、

- 1) 初期文明 (紀元前 600 年)
- 2) 古典文化 (紀元前 600 年から西暦 500 年まで)
- 3) 中世 (西暦 500 年から 1450 年まで)
- 4) 科学革命の時代 (1450 年から 1700 年まで)
- 5) 18 世紀
- 6) 19 世紀
- 7) 20 世紀

の7区分である。それぞれの時代区分に一章が割り当てられ、最後の一章でもう一度、各時代について略述されている。

メソポタミア文明において、記録媒体としての粘土板が登場し、紀元前7世紀にはリテラシー教育が行われ、紀元前4世紀には図書館の祖であるアレクサンドリア図書館が誕生する。西暦1世紀頃にはそれまでの卷子本の形態にかわり、コデックス(冊子本)が生まれ、4世紀以降は冊子本が主流となってゆく。粘土板から卷子本、冊子本とたどる歴史が次に迎えているのは新たな卷子本、ならぬWebブラウザである。Internet ExplorerやNetscapeでは、スクロールしてテキストを利用する。卷子本もスクロール(scroll)であるが、最も異なる点は、なんとといってもハイパーテキストであろう。ハイパーテキストの歴史は、ブッシュのメモックス(MEMEX)にまで遡ることができる。1945年7月、アメリカのヴァネヴァー・ブッシュは、「As we may think⁵(われわれが考えるように)」で、ハイパーテキストの概念を発表している。ハイパーテキストの出現によって、人は、線的アクセスから開放されることとなった。

メディアの歴史において、コデックス(冊子)形態の出現をグーテンベルク革命より重要視する流れもある⁶。コデックス形態のものを書物とすると、書物は1900年以上の歴史をもつことになる。さらに長い歴史をもつ粘土板に関しては、人類の記録の歴史において、その半分以上の歳月を占めていることに、新鮮な驚きすら感じる。粘土板まで遡るメディアの時間軸の中において、電子的資料は未だ揺籃期にあるということを改めて認識せざるを得ない。

変化の時代において、学術情報を提供する機関やサービスは、多様化している。学術情報を保存し、提供するのには、もはや図書館に限定される機能ではない。今後も多様化が予測される中、図書館の使命(ミッション)を明らかにすべき時期は既にきている。図書館は何を提供するところなのか、図書館があるためにどんな恩恵を受けられるのか、図書館は何を目指しているのか、利用者にわかりやすく示すミッション・ステートメントを作成することが、非営利組織だからこそ必要になる⁷。

では、ミッション・ステートメントを作成する際に、何が大切なのだろうか。ミッション・ステートメントは、単なる目標ではない。図書館の存在意義という根幹にかかわるものである。十年二十年のスパンではなく、少なくとも百年は掲げられるものでなければならないだろう。他方、全く時代を無視できるというものでもない。大きな時間軸の中で図書館を捉え、その使命を簡潔に表現することが最も重要なことなのではないだろうか。

本書の冒頭で、「もし私がより遠方を見ているとしたら、それは巨人たちの肩に登り立っているがゆえんである」というニュートンの言葉が引用されている。先人あるいは歴史という巨人の上に立って、まず遠く後方を見やり、そして前方に視点を移すことによって、よりよいミッション・

ステートメントの作成につながるのだと思う。そして本書は、巨人の上に立っていることを実感するのに格好の一冊となっている。

本書で特筆したいのが、Web 上での訳出のアフター・ケアである。訳者の Web ページ⁸にアクセスすると、2003 年 1 月 21 日現在、訂正 15 件とある。正誤表の他、訳に関する指摘に対するコメント等も掲載されており、必見である。

昨年(2002年)、世界最古の図書館のひとつであるアレクサンドリア図書館の復興が実現した⁹。ユネスコとエジプト政府が建設したこの新図書館には、総額 2 億ドルを越える資金が投入されたという¹⁰。プラネタリウムや博物館を備えた近代的文化施設で、「あやかしの声」が聞こえるかどうかは定かではないが、歴史の一頁に刻まれて、「巨人」に包含されることは間違いないだろう。

¹ 阿刀田高『あやかしの声 (新潮文庫)』新潮社, 1999.4, p.238-258

² B. C. ヴィッカーリー著・村主朋英訳『歴史のなかの科学コミュニケーション』勁草書房, 2002.12

³ Vickery, Brian C. "Scientific communication in history" Scarecrow Press, 2000

⁴ Vickery, Brian / Vickery, Alina "Information Science in Theory and Practice" Butterworths, 1987. 1992 年に改訂版が出版されている。尚、下記訳書がある。

B. C. ヴィッカーリー, A. ヴィッカーリー著 ; 津田良成, 上田修一監訳『情報学の理論と実際』勁草書房, 1995.11

⁵ "As we may think". <http://www.theatlantic.com/unbound/flashbks/computer/bushf.htm>

⁶ 清水徹『書物について：その形而下学と形而上学』岩波書店, 2001.7

⁷ ミッション・ステートメントについては、下記を参照のこと。

赤澤久弥「大学図書館問題研究会第 33 回全国大会報告」『大学図書館問題研究会・京都』, No.208, 2002.11.15

⁸ 村主朋英(muransky)のページ. <http://www2.aasa.ac.jp/~muransky/> [2003.2.24]

⁹ Bibliotheca Alexandrina. <http://www.bibalex.gov.eg/>

¹⁰ 「開館をむかえたアレクサンドリア図書館」Current Awareness-E No.3 2002.11.6

どんかい さおり (京都大学附属図書館情報管理課受入掛)

連載コーナー 大図研京都数珠つなぎ 第 64 回

「大学図書館の民主的発展」に思う

立命館大学 わかい つとむ
若井 勉さん

京都大学においての大図研京都支部結成の集会在開催され、「大学図書館員に期待するもの」と題した森耕一先生の記念講演があった。あれから早 30 年以上がたってしまった。国民のための大学づくりがさげばれ、図書館界の革新が要請されていた。巷に公共図書館では「中小レポート」の論議がされていた。

「情報化」(当時は機械化といっていた)も始まり、大学図書館員は課題が山積みされていた時代である。その中心が若い世代であったのは、今も変わりはないが、ベテランの図書館員からもよく学んだ。

ところが私立大学では、専門職制度もなく、古い体質の図書館が多かった。それでも「京都図書館協会」が活動している時は、青年部などが色んな企画を考え、例えば「京都市立図書館政策」の提言を検討したり、図書館の館種を越えた、研究会や文化財の見学会、スポーツ大会

の開催など交流がなされていた。各世代や業務課題毎の各レベルでの情報交換や人的ネットワークが京都中に張り巡らされていた。その協会が持ち回りの当番大学の事情から活動凍結となり、休止状態となってからは、京都の図書館界は瓦解の一途を辿ってしまった。

その痛恨の極みから大学図書館の交流、情報交換の必要性は課題の多さとともに急激に高まっていったことは歴史的な流れであった。そこへ図書館問題研究会から分離独立した大図研会員の呼びかけで支部結成の運びとなった。幸い、京都では労働組合でも「大学連合」(国公立大学の横の組織)があり、教育研究運動とも連動し、横の交流があったので、前向き集団で動きは速かったように思う。今どき、何故このようなさわりを述べたのかは、当時のバックボーンであった「大学図書館の民主的発展」の課題の大切さを今頃痛感しているからである。小生の大図研の活動を振り返ってみるに、1つは、私立大学からして国公立大学の専門職制度のシステムの上にとった専門性の蓄積に学ぶことが多かったこと。同時に自由に動けない国立大学の官僚的なシステムの弱点をはねのけ、私学に適用するかということであった。他大学の良い所は全部盗んだといっても過言ではない。2つはそれぞれの大学の特性をどう図書館に生かすかということであった。立命館大学では、当時、「現代化・総合化・共同化」ということが重要なキーワードであり、各部門、職場でこの視点をすえてどう業務や教育の創造をしていくのかを労働組合のイニシアティブですすめていた。

図書館では、大学教育に役立てた機能やサービスのあり方を追究・確立したことである。新入生へのクラス別ガイダンスやゼミ活動、就職活動支援サービス等、教育を軸とする大学図書館活動は今後とも重要な役割を担い続けるだろうと思われる。その上で、3つ目に大切なのは、政策とそれを支えるシステムを確かなものにするということである。内容・体制・条件を統一的総合的に捉えるという考え方・ポリシーを堅持することである。図書館員の要求や権利を政策と管理運営に的確に反映する努力である。知的な戦いでもある。その意味ではその基礎単位である職場労働組合を知的に確立する努力を絶えず活性化することが大切であると思う。民主的な発展とは、国民、学生、研究者と共同し、誰のための図書館をつくるかの原点を忘れないことではなかろうかと思うこの頃である。

支部委員からひとこと(1)

■大館和郎(京都学園大学図書館)【支部長/事務局長】

ただ今、蔵書点検作業の前段階として、閲覧室から書庫へ移す図書を選ぶ除架作業にとりかかっています。満杯状態になっている書架だけを対象にした緊急措置です。文書化された除架基準といったものはありませんが、「過去5年間に一度も借りられていない本」という基準でチェック作業をおこなってみました。図書に押ししてある返却期限印を調べるわけですが、受入登録印の日付が平成11年以降のものは、たとえ一度も借りられていなくても除架の対象外としました。この除架基準は図書選択論でいうところの要求論の考え方と同じです。しかし、大学図書館において、この基準ですべて押し通すことにはためらいがあります。実際、「ある学問分野において古典と見なされる本」が過去5年間に一度も借りられていないといった事例が出てきました。大学図書館において、学生がどのような図書を利用するかは講義科目によって大きく影響を受けます。たとえ、教員が講義中に参考文献として指定しなくても、調べていくうちに、よく引用される文献が出てくるはずで、その時に読んでみようという気が起こるかもしれません。そのような利用者である学生の要求(5年間に一度あるかないかの程度かも知れないが)を予想して、図書を評価することも必要であると思いますが、みなさんはどう思われるでしょうか。

■村上美代治（龍谷大学学術情報センター瀬田図書館）【組織担当】

『大学図書館ソリューションセミナーに参加して』

昨年12月に大学図書館ソリューションセミナー（富士通株式会社主催）への参加機会を得ましたので、当日の概要について紹介したいと思います。セミナーの目的は、富士通の図書館システムを導入している大学図書館を事例にしなから、現在直面している問題点と解決策を確認するとともに、今後の運営方向についての理解を深めることを目的として開催されました。

当日のプログラムは、富士通株式会社各担当者による「富士通の大学図書館への取組」「iLiswave・iLisSurf 新機能紹介」「東京電機大学図書館 iLiswave 構築事例」「学習院大学図書館 iLisSurf 構築事例」が主な講演でした。私がとりわけ関心をもった講演は、中央大学図書館事務部長 阿部臣弥氏の「競争時代における図書館経営～総合学術情報サービスセンター構想の目指すもの～」です。新たな高等教育政策が大学間の競争的環境によって創出させようとしている中で、個々の私立大学の図書館がいかなる戦略のもとで管理・運営を進めていこうとしているかを知りたかったからです。

阿部氏は中央大学図書館の生き残りをかけた取り組みとして、2003年4月発足に向けて検討されている「総合学術情報センター」構想の目的と概要について述べられました。従来、図書館の直面している課題は図書館のみで解決するというのが原則であったが、ネットワーク時代においては図書館のみでの解決は困難であり、学内事務機構の統廃合をも視野に入れた形での改革を目指しているとの説明がなされました。すなわち、(1) 既存機関間の連携から統合、(2) 統合と分散を調和させた全学横断的な体制づくり、(3) 事務組織の統合とネットワーク化です。この基本方針のもとに伝統的図書館と電子図書館との融合や情報の flow と stock（情報の選択的収集と保存）、図書館の identity の再確認（蔵書構成の確認と特色ある蔵書構築）、大学の identity と経営戦略についての検討がセンター構想実現に向けた取り組み課題であるとの説明でした。

中央大学での「総合学術情報センター」構想の取り組みは、事務機構としての事務組織、意思決定機構、人事制度の相互関係を洗い出す作業でもあると考えられます。とりわけ、改革の要となる専任職員の役割の高度化（政策力量）が求められていると考えます。中央大学以外の大学においても様々な改革が押し進められていますが、図書館の存立基盤を整備・確固としたものにするためにも全学的な調整のなかで具体的な対処策を提案していかなければならない時期を迎えつつあると感じました。

■金森孝之（京都大学経済研究所図書掛）【支部報発送担当】

『経済研図書閲覧室の改装』

昨年、閲覧室の雑誌架を更新して欲しいとの要望が掛内から出た。ついでに、閲覧室の様式替えをすることにして、凡その希望を言って、業者にレイアウトを作らせると、書架の見積もり金額が600万円という図面を持ってきた。こちらの予定金額より倍も多いので、びっくりして棚数を数えると現在置いている雑誌数に比べてものすごく棚数が増えている。随分と棚数を減らして、値引きさせてやっとこちらの希望するくらいの値段になったので、発注することになった。3月3日に納入が完了した。すごく閲覧室はきれいになったのだが、書架はプラスチックの前扉に雑誌を載せる形式で、これが非常に弱いため早速に2面の縁が欠けるという事故が起こった。今後のため前扉の予備を発注しておこうかという話をしている。

CGI を利用したアンケート調査の実施例

京都大学医学図書館閲覧掛

I はじめに

「ブロードバンド」「IT」「デジタル化」「ネット」……。最近の情報技術における進歩はめまぐるしいものがある。それが良いか悪いかはさておき、図書館をとりまく状況も同様に大きく変化しつつある。特に医学系の図書館にいて、今やたった5年ですら一昔前という感覚すらある。このような状況下で医学図書館のサービスが5年前とまったく同じでは、もはや時代遅れと言われかねない。米国医学図書館が Web 上に無料で提供する「PubMed」が公開されたのが1997年であり、この当時電子ジャーナル等はまだまだ存在すらあまり知られていなかった。ところが最近はどうか。次々に新しいデータベース商品、電子資料などのサービスが開発、販売されつつある。状況がこのように変化している以上、図書館のサービスも変わらざるを得ないのではないだろうか。良質なサービスはどんどん取り入れていくべきである。そこで以降では京都大学医学図書館での今年度一年の取り組みを紹介したい。

II 京都大学医学図書館の試み

当館では2002年度だけで3度のデータベースに関するトライアル・キャンペーンを行った。第一期は医学研究科の大学院生からいただいた一通の電子メールからはじまった。あるデータベースについて導入を検討してほしいという内容である。そこで当館では同時期にいくつかの主要データベースも含めてトライアルを行い、今後導入を検討すべきサービスを探った。第二期は以前から当館で導入すべきデータベースとして注目していたコクランライブラリーのトライアルである。同データベースは主に2つの会社から商品が提供されている。データベースを導入すべきか、導入するとしたらどちらのインターフェイスが使いやすいか、などを主眼にトライアルを行った。第三期は現在、実施中のトライアルである。これは書店の売り込みをきっかけに始めた。まったく同じ商品がスタンドアローン契約とネットワークタイプの契約で料金が桁違いになる。大学図書館がスタンドアローンで購入なら年間20万円程度、病院に900床以上ある大学ならば600万円（ちなみに学生が個人購入すると3万円）といった具合である。導入すべきか、導入するならどの契約が良いのか等が焦点である。もっとも、600万円のネットワークタイプが良いと言われても、到底当館の通常運営費枠では手が出ないので、どうしてもとなった場合はそれなりの手立てを考えねばならないのだが。

III アンケートの方法

600万円は当館にとって破格の金額だが、どのデータベースも実際に契約するとすると、それ相当の金額になる。潤沢に運営費があるわけではないので、そう易々とは導入できない。そこでまず、トライアルで実際使ってみることになる。しかし我々図書館職員が使うのも良いが、実際導入した際、使うのは利用者なのである。トライアルは利用者に試してもらう必要があり、またそのトライアルもただ一定期間実施するだけでは評価が得られない。当然、感想を寄せてもらう必要がある。そこでアンケートも同時に実施するのであるが、ネットワーク接続のデータベースのアンケートが「回答用紙に記入してください」では、あまりにも御粗末である。当然アンケートもネットワーク上で電子的に行いたい。

ネットワーク上でアンケートを収集するには主に3つの方法が考えられる。アンケートの項目をあげておき、電子メールで回答を送ってもらう方法。しかしアンケートはお願いして書いてい

ただ訳であるから、電子メールソフトをいちいち起動し、メッセージを書き込んでもらうとなるとかなり面倒である。それだけで回答する気が失せかねない。そこでよくあるのが HTML のフォームタグで入力フォームをつくっておき、利用者には Web のページに直接書き込んでもらい最後に送信ボタンを押してもらうという方法である。ところが送信ボタンを押してからが問題になってくる。データの送信先は FORM タグの ACTION 属性に指定されるがここに mailto: (メールアドレス) とすると入力フォームに書き込んだデータはブラウザ指定の電子メールソフトにそのまま渡される。つまり電子メールの設定ができていないと送信はできない。図書館の閲覧室などに設置されている不特定多数の人が使うパソコンでは電子メールソフトを使えなくしていることが少なくない。また個人用パソコンでも電子メールソフトによってはうまくデータが渡されないこともある。こちらが送ってほしいデータを利用者のメールサーバ経由で送ってもらうことになるので確実性を欠くことになる。このような問題が生じないのが、ACTION 属性に CGI プログラムを指定する方法である。入力フォームに書き込んだデータは Web ページの設置されている Web サーバの CGI プログラムに渡され、サーバの sendmail というメールシステムを利用する。入力に使用しているパソコンに電子メールの設定をしておく必要はない。

IV 危険の回避

ところが CGI ではサーバの sendmail システムを利用するため多用するとサーバに思わぬ負担がかかる、セキュリティホールのできる危険性が高いなど、気軽に設置できないという側面がある。特にセキュリティに関しては当館だけの問題だけでなく、そこを踏み台に別なところへの攻撃に利用されることも考えられる。そのような技術面で万全でない(例えその方面に詳しい職員がいたとしても、異動の多い大学図書館では体制が維持できない) 当館では Web サーバに CGI を設置するのは躊躇われた。そこで職員が自宅で個人的に契約しているプロバイダのレンタルスペース(契約者には 10MB まで無料提供される)でページを開設しアンケートを実施した。

V 実施例

以下は実際に行ったアンケートへの回答である。今回はアンケートをとる事の意味およびとり方についての紹介なので各データベースの詳細については割愛した。

(1) 「導入希望データベース」トライアル感想アンケート

<実施の経緯>

医学研究科所属の大学院生より補完医療・代替医療データベース「AMED Allied and Complementary Medicine」の導入を検討してほしい旨の電子メールをいただき、当該データベースにつき調査を開始。その結果、SilverPlatter 社(当時、現 Ovid 社)がデータベースを提供していることが判明した。また SilverPlatter 社のデータベースは紀伊國屋書店の仲介にて 30 日間の無料トライアルが実施できることが判明。トライアルは同時に複数のデータベースを利用することが可能であったため、他の医学系主要データベースについても同時に実施した。

<実施時期> 2002年6月3日(月)～6月末日

<内容>

The CINAHL(R) Database 【看護・医療・生物医学・健康】

EMBASE 【医学、薬学及び関連の生物医学】

EMBASE: Evidence Based Medicine 【EBM 関連】

SPORT Discus 【スポーツ医学、運動生理学、健康管理、体育教育等】

AMED Allied and Complementary Medicine 【補完医療・代替医療】

<アンケート結果>

The CINAHL (R) Database : 回答総数 2名 (内訳 医療技術短期大学部教官2名)

・データ内容について

- 1) Pubmed ではあたらない文献が調べられるので非常に有意義である。システムティックレビューを行うためには Medline と EmBase、われわれは特に CINAHL ありがたい。
- 2) 看護系の文献検索をするのには、主要な雑誌が含まれているので、検索しやすいです。

・検索の操作性

- 1) 使い慣れればよいと思われる
- 2) 使ったことがあるので、問題ありません。

・その他の意見

- 1) 是非そのまま使用することができるようにして下さい。4年制になったときに必ず必要です。

→ (導入について) 現在、検討中

EMBASE : 回答総数 3名 (内訳 医学研究科研究員1名、附属病院教官1名、医学研究科大学院生1名)

・データ内容について

- 1) ある特定の雑誌の中から検索をしたいとき、Elsevier 社のものは「'JOURNAL' in SO」という形でとてもよく検索できた。PubMed ではマイナーな雑誌では検索できないことがある。
- 2) やはり medline とは少し異なる文献が登録されているようです。
- 3) 1980-1988年のデータベースが提供されていなかった。

・検索の操作性

- 1) 過去に検索した文字が出てくるのはわかりやすい。
- 2) 良好.Websiprs で medline との違和感を感じることなく操作できる。

・その他の意見

- 1) ネットワーク側の問題ではあるが、KUINS-III からこのサービスを受けることができないのが、不便である。
- 2) 最近では、meta-analysis、systematic review の研究を行う際に、medline のみでなく EMBASE による検索を要求されることが多い (journal reviewer から要求される) ので、トライアルのみでなく、常に使用できるようにしていただきたい。

→ (導入について) 高額のため検討中止

EMBASE: Evidence Based Medicine : 回答なし

SPORT Discus : 回答なし

→ (導入について) 反応がまったくなかったため検討中止

AMED Allied and Complementary Medicine : 回答総数 3名 (内訳 医学研究科大学院生1名、医学研究科教官1名、医学研究科非常勤職員1名)

・データ内容について

- 1) 代替医療の報告は、PUBMED で調べにくいものも多く、大変便利です。これから、健康増進・行動学分野だけでなく、他の分野でも社会医学でこのようなデータベースは不可欠になるし、研究する人も増えていくと思いますので、是非検討していただければ、と思いました。
- 2) 代替医療関係のデータベースは、探しにくい論文を探ことができました。今後の継続をよろしく願います。
- 3) 非常に良い

・検索の操作性

1) 非常に良い

・その他の意見

1) 当教室では多くの学生が代替医療を勉強しているし、また来年度多くの学生がこの分野で入ってくる予定ですのでできる限り存続させてほしい。

→ (導入について) 現在、検討中

(2) 「コクランライブラリー」トライアル感想アンケート

<実施の経緯>

EBM 関連のデータベースはかねてから導入が望まれていたのでトライアル利用することになった。コクランライブラリーは複数の会社で商品化されており、またその商品を扱っている代理店も複数あるため、代理店との交渉状況でトライアルの時期が異なってしまった。

<実施時期と内容>

Aries System 社版 (代理店・SUNMEDIA 社) : 9月から11月末まで

Update Software 社版 (代理店・株式会社南江堂) : 10月から11月末まで

<アンケート結果> 回答総数 8名

(内訳) 医学研究科・大学院生【3名】、附属病院・大学院生【1名】、附属病院・医員【3名】、附属病院・教官【1名】

・Aries System 社版のデータ内容

- 1) PubMed で出ないような内容が出てきたので興味深かったし、実際に役立った。臨床試験結果が引きやすいのは良いと思う。
- 2) どれがシステマティックレビューで、どれが RCT のみであるのか、わかりづらい。
- 3) 多分、前にも答えたと思いますが、臨床研究のレビューがみることが出来るのが興味深い。PubMed でひいたものから選択する必要もないし。ただ、信憑性はどこが保証してるんでしょうか。
- 4) 今まで使ったことがなかったのでよくわからない。
- 5) よい
- 6) 充実していた。

・Aries System 社版の検索の操作性

- 1) 検索時に質問形式で出しても引けるのは面白い。でも出てくる文献の数は多くて、そこから選択するのは大変だった。良いものは見つかるけど、それ以外のものも引かかってくる。log-off がわかりにくくて、一度は log-off 前にページを閉じてしまいました。すみません。
- 2) 悪い。
- 3) キーワードの入れ方が面白いし、使いやすい。
- 4) やや使いにくい場面があった。
- 5) まずまず
- 6) そこそこよかった。

・Update Software 社版のデータ内容

- 1) Cochrane Library (コクランライブラリー) の階層構造がはっきりしていて使いやすい。詳細検索ができる、なおよい。
- 2) 内容は二つの製品であり変わらないと思う。

- 3) こちらも今まで使ったことがなかったのになんともいえない。
- 4) よい
- 5) 充実していた。

・ Update Software 社版の検索の操作性

- 1) よい。
- 2) キーワードの入れ方はよくある形。結果の表示は、なれないとわかりにくい。
- 3) 特になし。
- 4) よい
- 5) よかった。

・ 感想

- 1) コクランライブラリーは臨床をする上で必要な情報源です。どちらか一つでも院内から最新バージョンにアクセスできるのはありがたい。操作性からいえば、コクランの階層構造がはっきりしている方がわかりやすいので、Update Software 社製がいいと思う。
- 2) Aries System のほうが search result は見やすかったと思います
- 3) 内容自体は差がないと思われましたので、どちらでも良いような気がします。データの信憑性はどうなのでしょう。各論文に当たる方が確実なもので、そのあたりだけが疑問。それは単に私の無知で、十分に信頼のおけるレビューなんだろうが。
- 4) Cochrane は治療の総説としては優れており、必要である。Aries が図表がみやすい。Update は図表がみにくい
- 5) どちらも CD-ROM とくらべると使いやすい。ただ、詳しい検索をあまりしていないので、どちらかを選ぶのは難しいです。
- 6) どちらも差はないと思うがいえば、Update の方が使いやすい気がした。

・ その他感想

- 1) 結果表示はもう少し単純でわかりやすい方が、頭の悪い私には使いやすいです。図書館として購入を希望します。
- 2) いずれにしても、大学のオンラインからコクランにアクセスできることは非常に大切だと思います。授業や研究でもこれからどんどん用いていくことになると思いますので、ぜひ、トライアルではなく本格導入していただきたいと思います。
- 3) コクランが使えないのはとても不便です。どちらかは必ず使えるようにしてほしいです。
- 4) 二つの内容だけで検索したので、充分には理解してないかもしれないけれど、検索結果は興味深いものが出てくる。あとは必要なものを選び出すのが大変。もう少し絞れた検索結果が出ると嬉しい。新しいウィンドウがどんどん開いていくので、閉じていってしまうと、間違っって log-off しないで閉じてしまう。これは、使う方がうっかりだから？

・ どちらか一方を選ぶとしたらどちらですか

- Aries System 社版 . . . 3名
 Update Software 社版 . . . 3名
 無回答 . . . 2名

→ (導入について) 2003年2月から Update Software 社版を導入した。

(3) 「UpToDate」 トライアル感想アンケート

<実施の経緯>

データベースの日本販売代理店、株式会社ユサコによる案内。トライアルをはじめてから実は潜在的に導入希望があることがわかった。

<実施時期> 2003年2月26日(水)～ 実施中

<内容>

UpToDate は臨床支援ツールと呼ばれている。内科系 19 領域について、各領域のエキスパートが診療・治療・予防に関して平易な文章で書き下ろした指針を収録。アンケートのポイントとしてスタンドアローン価格 209,000 円、ネットワーク価格 6,067,000 円と利用形態で極端に価格が異なる点も考慮して回答していただいている。

<アンケート結果> 回答総数 11 名 (ただしトライアル開始一週間後の 3 月 5 日現在)

質問 1. UpToDate を試された感想をお聞かせください。

- (1)非常に役に立つので 600 万円かかってもネットワーク型をいれるべきだ。【8名】
- (2)役に立つがネットワーク型は高価すぎるのでスタンドアローン型で図書館に置くべきだ。【2名】
- (3)役に立つが購入する程でもない。【なし】
- (4)役に立たない。【なし】
- (5)その他【1名】

(自由記入欄)

- ・このような形で、600 万円が有用に使用されるのならば高い値段ではないであろう
- ・600 万円をはるかに上回る価値があると思います。
- ・UpToDate の有用性は、臨床現場の医師が疑問が生じたときにすぐに最適の情報を得られることである。スタンドアローンは無意味。アメリカの 200 床以上の教育病院なら、医師がすぐにアクセスできるようにネットワークで入っている。アメリカの研修医は、問題が生じたときに、本を開く前にまず UpToDate を叩いていた。少なくとも UpToDate に書いてある医療は「最も新しく、正確である」のでここに書いてあることを”意識して”医療を行うのは医療過誤の予防的処置としても重要である。医学図書館の負担が大きければ、病院の安全対策、質向上の一環として病院どこからでも 24 時間アクセスできるように病院の負担においてでもすべきである。
- ・内容は、私の領域(神経)に関しては教科書よりも詳細だと思われた。論文を検索するよりは治療方針の策定に役に立つ。それぞれについて参考論文が表示されるので、実際に内容を確認できる場所も使いやすい。
- ・患者の診断・治療についての、EBM の UpToDate の review ですが、米国では Cochrane よりはるかに高頻度利用されており、医師・医学生いずれにも役立つと思われまます。
- ・世界的にもスタンダードとなっており、国内でも私立の総合病院では最近導入されていると聞きます。今後の医療、医学教育など全ての面において必要だと思います。標準治療をすぐ検索できるので、PubMed で検索するより効率的です。
- ・(1)(2)で非常に迷います。かなり役に立つのは実際のところなので。ただ、600 万円がどのくらい図書館や学部の費用にダメージなのかはちょっとわかりません。

質問 2.すでに医学図書館で提供中のデータベース「The Cochrane Library」も EBM のためのツールですが比較して如何ですか？

- (1)「The Cochrane Library」より「UpToDate」の方がよい。【5名】
- (2)「The Cochrane Library」があれば十分。【なし】
- (3)内容的にかなり違うので比較できない。【5名】

未回答【1名】

上記、質問で「内容的にかなり違うので比較できない。」とお答えの方にお聞きします。具体的にはどのように違いますか？

- ・コクランは RCT を中心とした臨床試験を集めたもの。個々の疾患に関する疫学・病態生理・診断・治療・予防など教科書的なコクランからは情報は得られない。
- ・Cochrane Library は研究者向け。エビデンスの質が高いものはそろっているが、これだけでは臨床上の多くの問題は解決できない。論文を書く参考にはなる。UpToDate は臨床医向け。中にはエビデンスの質が高くないものも含まれているが、現時点では最良のもの。search 機能や jump 機能も優れており、臨床現場での使い勝手に優れる。
- ・EBM を重視して検索するには Cochrane が有用であるが、検索しにくい。エビデンスには乏しくてもこれまで行ってきた治療法にかんして見たいという観点では、UpToDate が見やすいように思う。
- ・cochrane library は質のよい研究のみを集めているが、up to date はそれ以外でも最新の研究を基に臨床現場に即した内容を多く掲載している。

VI 振り返って

アンケートを取ることに対し「取っても意見に答えられないから（取らない）」あるいは「取ると無理難題を書かれるから」などという批判をよく耳にするが、アンケートというものはサービスを展開していく上での判断材料として収集するものである。100 パーセント要望をかなえるのは勿論無理だが、今回の取り組みでは予想外の意見・感想なども聞くことができ、大変有益な情報がもたらされた。

必要なデータベースすべてが契約できるのなら良いのだが意外なほど当館の運営費は少ない。今後国立大学が法人化し、より一層厳しい状況も予想される。当然、契約できるデータベースも限られてくる。このような状況の下で「データベースのトライアル利用、アンケートによる評価」という市場調査を行った上での導入可否の検討という流れはデータベースの選択だけに限らず、図書館サービスの方針を決定する際のかなり有力な方法になると実感した。

電子的な情報が増え、非来館型の利用が多くなってきている。このような電子的な仕組みによる情報収集の手段がもっと重要になるのではないだろうか。現在、導入にまで至ったのはコクランライブラリーのみであるが、今後も利用者の生の意見を効率よく収集し、できるだけ利用されるサービスを心がけたい。

2002 年度会費納入のお願い

少しずつ温かい日が増え、会員の皆様におかれましてはご健勝のことと存じます。2002 年度大図研会費及び支部会費の納入状況をお知らせいたします。すでに年度も半ばを過ぎていますが 2 月 15 日現在で納入率は約 24% と依然として低い状況にあり、思わしい数字ではありません。

会費納入率の低下は大図研の活動に影響を与えるだけでなく、支部セミナーなどにも悪影響を及ぼします。納入いただいていない会員の皆様におかれましては、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願いいたします。

大学図書館問題研究会会費	¥5,000
京都支部会費	¥2,000
合計	¥7,000

会費は下記講座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員にことづけていただきますようお願いいたします。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904

大学図書館問題研究会京都支部

ご不明な点は京都支部財政担当・吉田（京都大学物理工学系図書室）までお願いいたします。

myos@m02.mbox.media.kyoto-u.ac.jp